

2016(平成28)年7月発行

都歴研

友の会だより 10号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方
電話・FAX 042-591-1853 ホームページ <http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>

「友の会」2015 年度研修旅行

台密と東密の歴史、湖北の風土と惣村

報告 村 木 逸 子

隔年で実施している国内研修旅行は、①仏教に関わることと ②中世の惣村がテーマです。

今回は仏教関係は京都の「東寺」と「延暦寺」を訪ねました。中世の村落は湖北の「菅浦湖岸集落」でした。参加人数 14 名企画立案も当日の案内も全てを小澤拓美氏に頼りきりでした。

(1) 事前学習会 9月30日(水) 15時～17時

会場＜新宿コズミックセンター＞

研修資料 研修テキスト 16 ページ、関連地図・図版など

仏教の成立、伝来に始まり密教に至る日本の仏教史、空海、最澄について、東寺、延暦寺について、菅浦集落の位置、歴史的景観について etc・・・

追加資料 質問に答えて密教、曼陀羅などについて

(2) 旅行実施日 11月16日(月)～18日(水)

第一日目

京都駅集合 12 時、近鉄に一駅乗って「東寺駅」で下車、京都駅の賑わいと比べて閑散とした駅で、無事荷物をロッカーに預けるこ

主な内容

- | | |
|----------------------------|----|
| 友の会研修旅行「台密と東密の歴史、湖北の風土と惣村」 | 1 |
| 友の会『歴史教育研究助成制度』平成27年度助成者一覧 | 6 |
| 関歴研埼玉大会講演報告7／都歴研秋季講演会報告8 | |
| 都歴研春季講演会報告9／都歴研春季史跡見学会 | 10 |
| 紀行 「幸福の国」ブータン(増田克彦) | 12 |
| 伊豆大島見学会～樋口秀司先生を偲んで～(木村清治) | 15 |
| 友の会 史跡見学のご案内～源頼朝時代の鎌倉を求めて～ | 16 |



東寺・五重塔

とも出来て身軽になって東寺探訪開始。「東寺」は京都駅から五重塔を見るのみ、あるいは「弘法市で有名」としか知識のない私には、東寺の意義、各建築物、仏像・・・など新たな発見ばかり。

京都はじまりの地＝東寺

東寺の位置について。平安京左京にあり、羅城門を挟んで西に西寺、東に東寺。西寺は今はない。恥ずかしながら、平安京の位置を知らず、なぜ京都駅より西にあるのに東寺というかが疑問だったのが分かる。今の京都は平安京とは違いますよということです。

南大門を入り境内の広さに驚く。ぎっしり木が植えてあったり足を踏み込めないお庭がお寺の姿と思いきやこんなに空間のある(飾らない)寺院もあるのだと驚きながら、**鎮守八幡宮、灌頂院**を見る。灌頂院では、**講堂にある十二神将が特別展示**されていた。

五重の塔は826年に空海によって造営が開始され883年頃完成、その後火事や落雷などで焼失し、1644年徳川家光らにより再建され現在に至るという。とにかく立派で美しい。あちこちから写真撮影。有料区域に入ると東大門や五重の塔の内部にも入ることが出来る。つづいて**金堂、講堂**へ。

金堂は東寺の本堂で、796年の東寺創立まも

なく造営された。それらは焼失し現在の建物は豊臣秀頼が発願し再興させたもので1603年に竣工。秀頼がこのような徳を施していることを知る。大きな薬師三尊像は桃山時代の作。

講堂は825年に空海が造営を始め835年には完成した。度々の戦火で焼失し、現在の建物は1491年に再建されたもの。フムフム、コロンブスが航海のスポンサーを求めスペインに行った頃の建造なのか、……。ここは**立体曼陀羅**で有名、大日如来を中心に菩薩、明王、天王、天など合わせて**21体の仏さまのオンパレード**である。一つ一つを観賞することはあっても一堂に会した仏さまをみる機会はない。それゆえ感動！ 絵葉書を購入。後日、友人たちと色々並べてどの仏さまがお気に入りかを品定めする。帝釈天や梵天が人気だった。このように21体並んで構成されていると分かりやすいが、大きく布地に刺繍されて数えきれない数の仏さまが登場する普通の曼陀羅はわからない世界である。

東寺散策の後半は**大師堂**。空海が806年に唐から帰国したのが33歳の時、その後の活躍のち43歳の時高野山を下賜され、50歳で東寺を下賜されている。空海は嵯峨天皇に灌頂を受けるなどこの寺にて様々なことを行なっている。

西院御影堂は大師の住房で国宝、堂内には不動明王と弘法大師像が祀られているというが実物は公開されないという。総檜皮葺の緩やかなカーブの屋根が美しい。



西院御影堂





司馬遼太郎は京都で待ち合わせをするときはここにするという。「京都の始まりの地であり静かなところである」ことがその理由とかいてあった。

最後に宝物館に寄り、慶賀門より出て、綜芸種智院跡に立ち寄り、出発点の東寺駅に戻り京都へ。観光客はそれほど多くなく静かに第一級の建物・仏像などを鑑賞できました。

それにしても9世紀初頭に唐の都長安に行き、インドから伝わって間もない新しい宗教を学び、仏具一切合切を船に積んで帰国し、新しい思想を披露した「空海」にただただ感動した。

国禁を犯して西域に脱出し遙かなインドまで仏典を求めて旅をした玄奘三蔵が長安でその仏典を漢訳し、日本からはその仏典や儀式や仏像を知るために多くの僧が渡航する。

このような古代の人々の知識欲と冒険心とそれを実際の社会に役立たせようとした意気込みを今の時代の人々にもっと語られなくてはならないと感じた。

宿泊は湖西線で近江舞子へ。琵琶湖周航の歌の2番「雄松が里の乙女子は赤き椿の花陰に・・・」と歌われた湖岸にある元国民宿舎



比叡山、雨中を行く

「未来館」にて。

元国民宿舎らしく質素でシンプルでした。京都に近く低価格のため、外国人には好まれているとのことでもありました。

空海のライバルだった最澄

第二日目

朝は湖畔でラジオ体操、全員参加。

近江舞子から湖西線で京都方面に戻り、比叡坂本駅へ。

この日の研修は空海のライバル最澄、つまり延暦寺である。あいにくの雨であったが比叡山坂本駅からバス、ケーブルを乗り継ぎまず横川中堂に。

横川（よがわ）は比叡山三塔（東塔・西塔・横川）の一つで、円仁が40歳の時に大病を患い療養した場所であるという。円仁が唐から帰国したのちに建てたのが横川中堂であるという。聖観音菩薩が奉納され、両脇に不動明王、毘沙門天が従っているという。

ヨガワではなくヨコカワと読むのだと思っていた私は事前研修の資料を広げてここがどのような意義のある場所なのかを慌てて探した次第である。

昼食は「比叡ソバ」「比叡うどん」。ソバにするかカレーにするか小澤氏は悩んでいた。どちらでも同じと思うが団体客の多い場合はソバの方が手際よく用意され運ばれてくるという。何故だろうか？ 美味しいソバでした。



浄土院

延暦寺根本中堂



次は西塔に向かい、にない堂、釈迦堂へ。

818年に最澄は6か所に造宝塔を建てたが山城の国のそれが西塔であり、近江の国が東塔であるという。私たちは西塔のある山城の国にまず行き、そこから近江の国へと国境を越えて東塔に向かった。

訪れたのは浄土院である。浄土院は円仁が建てた最澄の墓所である。境内には菩提樹と夏椿があり本当に静かな境内で、どこからか読経の声が聞こえた。観光客は殆ど来ない。雨が激しくなる。

最後に根本中堂、戒壇院へ。さすがここは観光客の人の波、ここだけ見てお参りして比叡山に行ってきたということになるだろう。修学旅行でも見学するのはここだけであった。

坂道の各所にここで学んだ僧侶についての紹介？があった。空海との比較でいえば平安時代に人気のあったのは空海で、最澄は弟子を何人も空海にとられてしまったという。しかし、平安後期になると「延暦寺」に学んだ僧侶が新しい仏教を立ち上げている。このお寺の凄さである。源信、道元、親鸞、日蓮などがこの荘厳な自然環境のなかで修行し、新たな思想を起こすべく山を

下りて行ったことに思いを馳せる。そういえば今東光も瀬戸内寂聴さんもここで修行した。

案内者の小澤先生が9世紀の平安京とその周辺の地域を舞台に、唐から新しい仏教を取り入れた僧侶、空海と最澄の歩みと対立を生き生きと語ってくださり、実際に二人の僧に関係する地に来て二人の実像が浮かび上がり、二人の僧の偉大さを知ることとなった。最澄を崇拝し、困難を乗り越え唐に学んだ円仁をこよなく愛する小澤氏にとって、円仁の足跡が辿れる延暦寺は心の故郷の山なのであろう。

ケーブルとバスを乗り継いで比叡山坂本駅へ。湖西線で「永原」下車 「今晚の旅館はすごいよ」と期待させてくれる。この日宿泊した「つづらお」は大変立派な宿でした。夕飯の食卓はごちそう攻めででしたし、眼前に湖水と竹生島をみでの温泉はこの日の疲れを癒してくれた。前日と比べて何もかも上位にあり。

食後の学習会では小澤先生が最澄の一生を空海と競わせながら語り聞かせてくれた。この辺りが小澤氏の強調したいこととあらためて理解しました。



東寺での記念撮影



隠れ里の風情＝菅浦

第三日目

朝食後すぐに「菅浦」の見学に。

文化財保護法の中に「重要文化的景観」という保護項目があり、菅浦は平成 26 年 10 月 6 日に選定された。

菅浦集落はその重要な景観が失われつつあって、文化的景観に指定されることによって維持保存ができるようになってきているという。

菅浦集落は中世の惣村の姿を見ることが出来るというのが・・・慌てて調べる。

<惣村とは鎌倉後期に生まれた自立的・自治的な村であり、寄り合いといわれる村民の会議があって、村の掟を定めたり自身で警察権を行使することもあったという>（日本史用語集から）

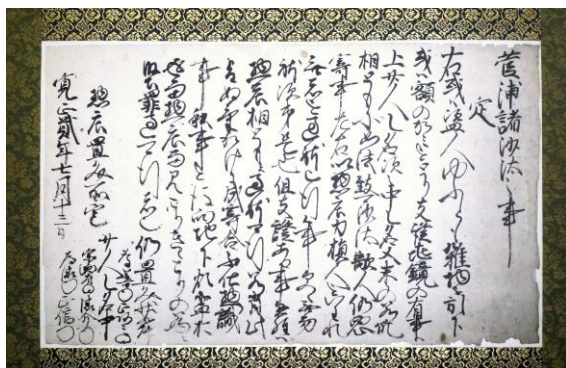
共有地の管理、灌漑用水の管理もおこなっていたということで、共有地としての田んぼ、用水跡など見る。集落の境を示すところに四足門があった。敵の攻撃を防ぐための工夫などがしてある。

村の鎮守としての須賀神社は格調高い神社で、以前は裸足で参詣しなければならなかったそうだが現在はスリッパが置いてありそれを借りて参詣。見晴らしのよいところである。
郷土資料館に入って「菅浦与大浦下庄堺絵図」

などを見る。

重要な古文書は 1255 通あって現在は「滋賀大学日本経済文化研究所」に保存されている。かつては琵琶湖の北部の交通の拠点であったこの地域には「丸子船」が作られ取り引きで賑わった跡もあった。

遠藤周作が「他人に教えたく無いところ」と言ったとい



うように、隠れ里の風情のある静かで美しいところでした。湖畔には桜の木も多く、春はまた別の風情のある華やかな村となることでしょう。

研修旅行を終えて

実に内容豊富な研修でした。日本史に詳しくない私など空海・高野山、最澄・比叡山の組み合わせで記憶しているのみ。ところが空海は新しく開かれた京都が活動の舞台で、それは権力闘争もある現実的な世界で、外国から巨大な仏像や仏具や曼陀羅の織物を持って来て派手なセレモニーをしたという。仏さまのオンパレードが立体曼陀羅なのだと理解しました。どの仏さまが「美男におわす」のかと見る。帝釈天がハンサムとの評もあり。

最澄は生まれ故郷に近い比叡山で祈禱をする。その後比叡山は多くの僧侶を生み出す。奥の深いお山でした。湖北の晩秋の景色も堪能し多くのことを学ぶ本当に中身の濃い旅でした。
あらためて小澤拓美先生に感謝いたします

友の会『歴史教育研究助成制度』 2015年度助成者

都歴研友の会が、昨年度から現職の歴史教育研究者を支援するために創設した歴史教育研究助成制度に基づき、昨夏東京大学伊藤国際学術研究センターに於いて開催された全歴研第56回大会東京大会の分科会で、東京都から発表された以下12名の方々に、研究助成として額面5,000円の図書カードをお贈りしましたのでご報告申し上げます。

都歴研友の会 世話人会

助成金贈呈者一覧 (全歴研分科会での発表者)

第2分科会 (日本史)

「近現代の日本について国際環境と関連付けて考察する」

提案1 合田 尚樹 (都立戸山高校教諭)

「世界の教科書から見る第一次大戦—
日本・ドイツ・ロシア異なる立場を考
える」

提案2 鳥羽 顕治 (都立富士森高校教諭)

「絹の道～生糸貿易と近代化」

第3分科会 (日本史)

「『世界の中の日本』について多面的・多角的に
探究する (江戸から東京へ等)」

提案1 武藤正人 (都立日野高校主任教諭)

「『東京オリンピック』を通して日本社
会を考える学習指導—『1964オリン
ピック』に着目して」

提案2 佐々木彬人 (都立羽村高校教諭)

「『江戸から東京へ』を活用した日本史
の授業実践」

第4分科会 (世界史)

「近現代世界の特質と社会の変容について考察
する」

提案1 土屋斎嘉 (都立武蔵丘高校教諭)

「近現代の諸思想をどう教えるか」

第5分科会 (世界史)

「主題学習『今日の世界が直面する課題』につ
いて歴史的視点から探究する」

提案1 海上尚美 (都立浅草高校主任教諭)

「ミュージアムを授業に～であう・たの
しむ・つながる～」

提案2 大倉 由尚 (都立浅草高校教諭)

佐藤 慎也 (都立小金井高校教諭)

白田 雪絵 (都立大崎高校教諭)

武井 祐輔 (都立桐ヶ丘高校教諭)

原田 亮太 (都立永山高校教諭)

「定時制高校における『学び直し』と『生
きる力』～5校共通実践報告～」

提案3 吉岡 大輔 (都立竹早高校教諭)

「日米の高校生の描画を活用した授業
づくり」

友の会だよりへ投稿のお願い

例年同様7月中には発行します。以下の要領で会員の
皆様の原稿をお待ちしています。

内 容: 研究要旨、資料紹介、書評、紀行文等何でも。

字 数: 2000字～3000字

著作を刊行された場合には書籍そのもの、または要旨
をお送り下さい。紙上でご紹介します。

送付先: 〒191-0033 日野市百草971-158 増田方
東京都歴史教育研究会友の会事務局

都歴研友の会ホームページ

<http://sky.geocities.jp/torekikentomonokai>

友の会の諸連絡、国内・海外研修旅行の記録、
「友の会だより」バックナンバーもカラーで。

関東平野の戦国時代 ―東関東と西関東―

講師 築瀬大輔氏

群馬県立歴史博物館学芸係主幹

初めに埼玉県高等学校社会科教育研究会歴史部会長の高橋先生から「数年前に講演を聞いて以降『追っかけ』をやっています」という異色の講師紹介があった。講演内容は、まさにその紹介にふさわしい充実したものでした。

まずは、戦国時代の時代区分として、1455年の（足利成氏の古河移転）に始まる享徳の乱から、長享の乱（両上杉の対立）が1505年に一応終息するまでの約50年を戦国時代前期として古河公方と関東管領との対立が広がった時代とする。

次の戦国中期約50年は、地域を一元的に治める領国権力の成立期で、畿内の惣村制のような村請が関東にも広まり、領国を排他的に支配する戦国大名が登場してくる。古河公方家と山内上杉家のそれぞれの内紛が関東一円に広がる。

1554年の第一次甲相（武田と北条）同盟以降は戦国後期で、上杉・武田・北条が三つ巴の同盟・抗争（宇都宮・佐竹も加わり）をしたあと豊臣政権による小田原城開城にいたる。

次に、この舞台となった地域区分について、「河東」と「河西」という概念があったことを史料に基づいて説明されました。「河」とは利根川のみを指し「越河」という熟語が頻繁に各戦国大名の文書に出てくる。21世紀の今日、「北関東・南関東」といういい方はするが、「東関東・西関東」といういい方はほとんどない。中世人はなぜそのような認識を持ったのか？ということについて、大変興味深く、かつ説得的な説明をされました。つまり、概ね利根川（当時は江戸湾流入）を境に、東方の下野・常陸・下総・上総・安房には小山・佐竹など「関東八屋形」

といわれる伝統的豪族層が力を持っていた。

これに対して、西方の上野・武蔵・相模・伊豆においては鎌倉北条氏の直轄領が多かったため小規模の在地勢力しかいなかった。これゆえ、東方においては貴種古河公方を迎え入れ、西方においては関東管領上杉が足利幕府権力を後ろ楯とした支配をすることが出来たというのである。つまり、前段でのべた戦国時代3区分は、関東における政治・社会構造に大きく依存している、という考えである。

このことは、単に関東の郷土史的な興味にとどまらず、論者の言う（もともとは峰岸純夫氏の研究に依拠）「戦国時代は、関東に始まり関東に終わった」ことを考えれば、日本史全体にかかわることであろう。

その後、なぜ「南関東・北関東」というような概念が生まれたのか？とか、軍勢が利根川を「越河」する地点は？現日本地図で5県の県境が平地でほぼ接しているのは関東だけなど興味深い解説がありましたが、長くなりますので割愛します。

興味のある方は、講演者の著書を紹介しますので、お読みください。

「戦国史―上州の150年戦争」（上毛新聞社 2012）

「関東平野の中世」（高志書院 2015）

このように意義深い研究会を持たれた埼玉県社会科教育研究会の先生方に深く感謝申し上げます。

（報告 小澤 拓美）

中世経済史研究の最近の動向と日本史教科書

講師 桜井英治氏 東京大学教授

桜井先生は学部時代に考古学専攻で、大学院に行ってから中世史になったと言う異色の研究者です。まず「岩波講座日本歴史」始まりから戦後4回目（60年代版、70年代版、そして90年代版の「日本通史」に続き）の今回（2013～16発行）に至る中世史研究の特色についての説明があった。この間、60年代の石母田正氏に始まる「領主制論」（多くの地方領主による分権的社会だった）と、70年代の黒田俊雄氏に代表される「権門体制論」（諸々の権門がそれぞれの立場で国家を支える社会だった）の間で中世史研究は揺れ動き、研究者たちは祖父の世代に似るような動きをする、という喩えは「なるほど」でした。

また、考古学の知識を反映させた歴史の見方もユニークなものがありました。自然において氷河期と間氷期が交代するように、人間の歴史も直線ではない。経済史をみても、劇場型消費と緊縮財政の時期が波のように交代する。ゆえに美術工芸なども、平安末期の工芸品は鎌倉時代よりもはるかに高い水準にあったりする。概ね権力の形成期と崩壊期に、建築・工芸などに見事な作品が出来るようだ、とのこと。

アジアの国際秩序の中で見る、という視点も面白いものがありました。アジア諸国は、中国・中国隣国型国家・辺境型国家に3区分出来る。高麗・李氏朝鮮・ベトナムは隣国型で、日本や、マジャパイト王国は辺境型である、とのことでした。そして、中国や朝鮮は次々と前時代を超えて行く移りゆく文化であり、日本やマジャパイトは累積する文化という特色を持つ、と指摘する。前者は「そばつゆ」文化、後者は「うなぎ

のたれ」文化と言える、とか。

古代において皇朝十二銭などが作られたのに、中世になにゆえに宋銭・明銭を輸入して使うようになったのか。また、中世は貫高制という貨幣経済だったのが、近世社会になると石高制という逆戻りのようなことになったのはなぜか。これらは、単純に「歴史は常に進歩する」というような見方では分らない。

古代末期から中世初頭にかけて、朝廷はたびたび宋銭流通の禁止令を出した。また、荘園整理令をしばしば出した。これらは、単に外国貨幣の抑制や荘園増加の停止という観念的なことよりも、内裏造営のため米・絹などの年貢確保と、その現物貨幣としての価値の維持を狙ったものと考えられる。1227（安貞元）年に内裏はまたもや焼失したが、その2年後の1229（寛喜元）年の整理令が成果を上げない中で、ついに内裏再造営は断念され天皇は里内裏に移ることとなった。現在の京都御所が平安京時代の内裏と違う場所にあるのは、この時以来ということになる。

最後に、山川「詳説日本史」の執筆者として、最近の教科書で工夫したことをいくつかご教示してくれました。特に、「代官請」が入ってきていることは驚きでした。帰宅してから確認しましたが、2010年版（中世執筆は桜井氏）教科書には入ってなくて、2014年版山川用語集には②として入っていました。今年度の友の会研修で湖北の菅浦や、大浦に行きましたが、今回の講演でこれらの村落を見る目が深まったように思います。

（報告 小澤 拓美）

古代オリンピック ギリシア人のころとからだ

講師 橋 場 弦 氏 東京大学大学院教授

講演の参加者数およそ 30 名(今回の特例として三鷹中等の生徒 3 名が参加)でした。以下、要旨を報告させていただきます。

はじめに：古代オリンピックは、BC776 年の第 1 回から AD393 年の第 293 回まで、1200 年もの間途切れることなく開催された。

1. オリンピック 古代と現代：両者の共通点は、①4年に1度8月上旬に開催されること。②国際的な祭典であること。相違点は、古代オリンピックはオリンピアの神に捧げる宗教的な祭典であり、古代ギリシア人にとって楽しみではあるが、畏怖をもってとらえられていたこと、である。オリンピックは、エリス地方のオリンピアで開催された。そこにはゼウスの神託所があり、周辺豪族の集会の場として祭祀が行われていた。それが BC 8 世紀に国際的な祭典となった。エリス地方が当時の僻地で、ポリスの成立も遅れた中立地帯であったことが、ローカルな祭典が国際的な祭典となっていた理由である。ギリシアにはオリンピックを含め 4 つの大競技祭があったが、オリンピックが最高の権威を持ったのは、開催国がエリスという大国の支配を受けていない小国で、開催地オリンピアが神域のある地であったことによる(他の競技祭は、大国による開催であったり、常にもめていた隣保同盟による開催であった)。

2. 大会プログラムと競技：オリンピック期間中の聖なる休戦とは、オリンピックの前後 3 か月間、大会とその参加者に武力行使をしないという状態を作り出すことで、オリンピックを開催すること自体の重要性に基づいている。大会日程は、開催前日に選手団がオリンピアに向け

て行進し、1 日目に選手・審判の宣誓が行われる。宣誓は、これを破ったら呪われるという恐ろしいものであった。その後、競技となるが、3 日目はゼウスのための大犠牲式が行われるため競技は実施されない。5 日目に、表彰式と祝宴が行われ大会は終了となる。競技種目には、戦車競走、幅跳び・円盤投げ・槍投げなどの五種競技、192m を走る徒競走、武装競走、格闘技(レスリング、ボクシングなど)などがあつた。

3. オリンピア遺跡めぐり：ゼウスの神殿跡や神像、現代オリンピックの採火式を行うヘラの神殿跡、競技場、審判団席、競技優勝者記念碑などが遺跡として残る。

4. オリンピックは何のために？：常に戦争状態にあるギリシアであるから、競技は軍事訓練のようにみえるが、軍事大国スパルタの人が優勝を独占しているわけではない。また、軍事に関連する競技も実戦には役立たない。それでは、富と権力を得るためか。結果として、競技の優勝者は多額の報奨金を獲得し、それなりの権力にも恵まれる。しかし、オリンピアの競技祭で与えられるのはオリーブの冠のみ。すなわち、ギリシア人は世俗を越えた価値、名誉のために競技していたと考えられる。それは、競技が神を慰めるための祭りとして行われること、そして競い合うことそのものに価値を認めていたからである。また、競技が裸体で行われるのは、服装により選手の貧富や身分の差が審判や観客に分からないようにして、純粹に競争を行うためである。競い合いは、自由で対等なポリス市民の社会関係が前提にある。オリンピックに参加すること自体が、自由人であることの証であ

った。自分の身体を自分以外の誰からも支配されないのが自由人であり、それゆえに奴隷は競技をする資格がない。

5. まとめ：古代オリンピックは1200年の間一度の中止もなかった。近代オリンピックは

120年間に4度も中止された。古代には神々への畏怖、聖なる価値への信仰が背景にあった。金目のものを越えた聖なる価値を目指して競うことが本来のオリンピックの姿であった。（報告 竹内 秀一）

都歴研 春季史跡見学会

「船で巡る江戸・東京の経済史」

3月13日（日）8時銀座「和光前」集合、17時王子駅解散。友の会参加者4名、全体では40数名であった。

＊

朝早く銀座に集合して思いがけない発見をした。地下鉄を下りて地下道を歩くが人影が殆どない。外に出て「銀座4丁目十字路」に立ったがここも人影が少なく静かである。40数名もの集団が行動するには最適の時間帯であることがわかった。きれいに掃き清められた銀座の町を午前8時台には通行人に迷惑をかけることなく歩くことが出来たのである。

中央通りを銀座から京橋へ。「銀座発祥の地碑」「ガス灯・煉瓦の碑」「京橋親柱」「青物市場跡碑」「江戸歌舞伎発祥の碑」「江戸秤座跡」など。見学委員の案内は史跡巡りだけでなく街角に立って江戸時代の切絵図、錦絵なども示して現在と対照させ、江戸時代にタイムスリップできるような工夫もあり嬉しかった。

「日本橋」は高速道路に覆われて無残になったが、最近は周辺が整備されてきた。「道路元



標」「高札場跡」「魚市場跡」をみて「三井本館」へ。建物はコリント式の大列柱が見事である。内部の円柱はドーリア式であるという。この建物は重要文化財に

銀座発祥の地碑



指定されている。団琢磨暗殺の現場となった出入口や彼の執務室を当時の新聞記事を読みながら見る。

＊

10時からは「三越・日本橋本店」見学組と「貨幣博物館」入館組に分かれて交互に両方を見る。三越は江戸時代の「越後屋」を前身として「越後屋呉服店」へ、更に近代百貨店「三越」へと変遷したく日本橋の花形である。最近には館内を案内する専属社員がいて、有名なライオン像、パイプオルガン、アール・ヌーヴォーの意匠の天井、建物に使われた大理石（イタリア出土のピンク色の貴重な大理石）のなかに見えるアンモナイトなどを説明していただく。地下鉄通路に「熙代勝覧」＊があり、そこも案内された。これは大変面白いもので江戸の風俗がよく分かる。「貨幣博物館」はリニューアルされ展示方法も工夫され、体験コーナーが増えた。日本における貨幣の歴史を全て見る事が出来るのだが、

次を急いで忙しく駆け回って見ることになってしまった。

＊

11時 今回のお楽しみ「**神田川クルーズ**」である。「日本橋」の船着き場で乗船、日本橋川・神田川・隅田川を巡回して日本橋に戻るコースである。「昼食は時間の節約で船の上で各自持参の弁当を食べる」「手持ちの昼食のないものはここで購入を」と事前にコンビニで購入、少し寒い日で川風に震え、冷たいお茶を飲みながらおにぎりを頬張っての豪華な！クルーズであった。感想としては、極めてよろし。通過した橋の数は30余、日本橋川では河岸に石積みされた城壁を眺め、神田川の部分では総武線の水道橋駅、御茶ノ水駅間の線路に沿って普段は眼下に見る水路をゆったりと進み、柳橋から隅田川に出ると後方にスカイツリーがみえて「絶景かな！」である。水の都江戸・東京をもっとアピールすべしと痛感した。水上都市ヴェネチア研究家の陣内秀信氏が提案していたが、その意見が実現されつつあるようだ。

＊

午後2時 京浜東北線王子駅に集合せよということで、地下鉄銀座線で日本橋から神田へ。京浜東北線にて王子へ急ぐ。渋沢栄一という日本の近代化に数多くの業績を残した偉人の晩年の住居のあった飛鳥山に。

「紙の博物館」と「**渋沢資料館**」を二つのグループに分かれて交互に見学。紙の博物館では和紙のハガキを作成するコーナーにも案内された。渋沢史料館見学の後は「**晩香蘆**」と「**青淵文庫**」も案内していただく。「王子製紙」は渋沢の起こした企業の一つであり、この土地が水の供給が豊富だったことが立地条件の一つだったという。今では全く分からないが。

＊

江戸から東京へと移り変わった町には思いがけず江戸を振り返させてくれる地名や町の構造が残っていた。見学委員会作成の資料ファイルはずしりと重く、中にはカラフルなページもあ

って宝物である。街歩きの資料にしたい。

＊

「友の会」の人にオススメです。

1 「三越」観光

毎月第二土曜日には専門の案内係がついて説明してくれる。クラシックなデパートには歴史的な装飾や豪華な調度品があります。

2 「神田川クルーズ」

屋根もついていない素朴な船で縫うようにして江戸の町を楽しみ、隅田川にも遊ぶという専門家向き(?)のコース。日本橋の橋のたもとに船着き場あり

3 「貨幣博物館」

日本銀行付属施設 それゆえか入館料はなし。体験学習コーナーも楽しい

4 「**熙代勝覧**」(きだいしょうらん) **絵巻の鑑賞**

この絵巻物は、今から200年前の文化2年(1805年)の江戸日本橋から今川橋までの町並みを俯瞰して描いたもので作者は不明。実物は1232.2cmの長さのものである。

1995年にドイツで発見され現在はベルリン国立アジア美術館に所蔵されている。

通りには問屋や商店が並び賑わっており、一軒一軒が細かに生き生きと描かれている。合わせて88軒の問屋や店、1671人の老若男女、色々な動物が登場しているという。

中央区が記念事業の一環として1.4倍に拡大した(17mになる)複製を作り、和紙に印刷されたものが地下鉄の通路の壁面に展示されている。

東京メトロ「日本橋三越前」駅下車 三越デパート中央口に入るところ

この作品の価値も知らず、ゆっくり見る時間もなく過ぎてしまったことを後悔している。機会があったら(三越でお買い物などする際に)じっくり見てみたい。1671人もの人間が描かれているとは……………。

尚、この絵の詳細はインターネットで「熙代勝覧」を検索すると出てきます。ご覧ください。

(報告 村木 逸子)

「幸福の国」 ブータン

増 田 克 彦

タイ航空機で羽田を出発、バンコクで一泊。翌日ブータン航空機でコルカタ（カルカッタ）を経由して標高2300mの世界で最も離着陸が難しいと言われるパロ空港に着く。現在、日本からのこのコースは一日一便である。

多様な民族

ブータン王国は面積約38,394平方キロ、人口約73万、住民の殆どは自らをドツパあるいはルッパ（龍の人）と称するブータン人だが、言語もその文化もチベットとの関連を伺わせるところから、恐らくはチベット系と考えてよいのだろうが不明。東ブータン先住民、チベット系、ネパール系などと民族的にも多様。従って、公用語はゾンカ語だが谷ごとに言語が違いう。ティンプーのホテルで会った岩手大の言語学の方は共通語の作成を手伝っているとのことだったがはたしてそれが良い事なのかどうか。学校教育が当初インドの全面的援助のもとに始まったことと言語が多様なことから、ブータンでは小学校の一年次から英語の授業が入っており、若者はまず間違いなく英語が喋れる。宗教も事実上の国教はチベット系カギユ派のドゥルック派とのことなのだが、チベット系仏

教、ヒンドゥー教とこれまた多様である。

残念ながらブータンの歴史は詳らかにできない。8世紀以降の事象が多少知られるが、1907年に族長間の争いを収めたウギエン・ワンチャック以降現国王は5代目。第3代国王の治世以降急速に近代化が進められている。奴隷解放が行われたのも第3代国王の時と言われるのだが実態は良くわからない。

国民総幸福量が政治指針

見るところ経済格差は恐ろしく大きい。県ごとに国営の寺院があり（添乗員はこれを国分寺と言ったが）、人々の信仰は極めて篤く寺院への喜捨は甚大。事実上の政教一致、「宗教はアヘンである」は名言であり正しいとの思いを新たにした。



changangkha middle secondary school
のこどもたち

二院制の議会を持つ立憲君主国。2008年、初めての総選挙、同年憲法採択、国民総幸福量を政治指針とするユニークな国である。結果、ブータンは幸福度の極めて高い国と喧伝されているが、実のところはどうか。

幸福度の調査項目や調査方法にも問題ありとされ、他の国々との比較は難しく、また現地ガイドが私は幸福ではないと即答したのも印象的だった。犯罪は殺人以下一通りあり、刑務所もある。直近では東ブータンで土産物屋の女主人を殺し、猫目石を奪って逃げた者がまだ捕まっていないという。なお、訴訟案件で一番多いのは土地争いだそう。

通貨単位はニュルタム。1ニュルタムは日本円に換算すると2円弱。インドルピーがそのまま通用し、アメリカドルで買い物ができる。

8月は雨期だがさほどは降らず、朝晩の気温差は多少あるものの暑くもなく寒くもなく、且つ乾燥しており爽やかといったところ。

宿泊施設、食事等は予想を超えて快適なものだった。ブータン産の蒸留酒はあまりいただけなかったが、レッドパンダビールをはじめ計4種のブータン産ビールはなかなかの美味。公の場での禁煙は言わば流行だが、ブータンの場合、全面禁煙。外からの持ち込みは2カートンまで、しかも200%の税がかかる。従って煙草を吸う姿は全くない。少々面倒なのは、必ずしも全ての寺院ではないが、ゾン（城）や寺院では襟のついた長袖、長ズボンの着用が求められることか。

子どもは水葬や鳥葬に

そこここに火葬場がある。聞くと、死亡年齢2歳までは水葬、7歳までは鳥葬、それ以降は火葬し川に流す。子どもが水葬や鳥葬なのは年齢がいつていないため功德を積んでいなので、魚や鳥に捧げ功德にと言うことらしい。おとなは火葬後、額の骨を細かく砕いて円錐形に丸め、川の見える場所に置く。途中、黄色を基調とした美しい座棺に会った。死者を祀る白い旗がそ



ここにはためく。長方形の、経文が印刷された旗である。本来は108本立てるのだが経済的に無理ならばその限りではない。生きているものの幸福を願う五色の旗もいたところになびく。

教育と医療に最も力を入れているとのことだった。教育は無償である。とはいっても、小学校から大学まで授業料はかからないものの、10年生までの制服代、昼食代、副教材費などは無料ではないため、経済的に中途退学を余儀なくされるものも少なくない。大学はパリ大学のシステム。高校・大学と進むのも難しいが、大学を出ても就職は厳しい。JICA関連でボランティア活動をしている女性の言うには、多くの農民は自給自足、外界を知らぬこともあって不足を感じず、高学歴の者は妙なプライドがあってなかなか難しいとのこと。現地ガイドの一人は4年生で退学し僧侶になったものの家族を支えるためにこれも3年で辞めガイドの道に入って7年、今日本語を猛勉強中との事だった。

もうお一方は家族労働力が減るのを嫌った父親が学校に行かせるのに反対したが、たまたま村を訪れた王妃が行かせなさいとおっしゃった

ため学校に行くことになったとのこと。彼は結果高校まで出、現在裕福になったので出身の村に毎年50キロの米を寄付しているという。

文殊菩薩を讃える経を唱和

このガイドのいところが校長をしている学校を訪問し朝礼の様子を見させてもらった。この学校は5歳児保育と日本でいうところの特別支援学級を併設する、児童生徒数750、教員59、職員20。始業前30分清掃、雨の日を除く毎日全校集会、生徒代表による文殊菩薩をたたえる経の唱和、生徒と教員による講話がブータン語と英語で行われる。国旗掲揚と国歌斉唱。この日はこれに生徒と教員の表彰があって、計25分、集会後、日本のアニメで日本語の勉強をしているという何人もの可愛らしい女子生徒が寄ってきた。教員の初任給は17,000ニュルタム程、都市部のマンションは家賃が7,000前後するため楽ではない。校長の給料はその倍程度、但し官舎がある。

医療も無償だが、極端な医師不足にあえいでいる。医者がいるのは県の中心都市のみ、村には診療所があるものの保健師が滞在して病気の予防や出産の際の助言をしている程度、村を訪れた際、巡回診療に出くわしたが一人の医師と二人の保健師が村人全員の健康診断にあたっていた。我々のメンバーで転んで出血していた者がおり、応急処置をしてもらったが、これも無料。

電気は水力発電で間に合いインドに輸出もしているが、ガソリンは全面的にインドからの輸入。家畜も魚も殺さないブータンでは肉や魚はインドからの輸入、そのほか食器類、ローソクもマッチもインド製。あらゆる生活の場にインド産が浸透している。それだけではない、イン

フラ整備で働いているのは殆どがインド人、労賃も安く技術も高いからと言う。ブータン政府は現在、インドの顔色をうかがいながら中国との交流を図っているとか。

仏画の描かれる壁、美しい家屋

結果として今回、パロでは西岡京治記念館、国立博物館、ブータン最古のキチュ・ラカン寺院、夕食後の伝統舞踊を見、新都ティンブウでは、伝統染色の実演と民族服（ゴ・キラ）の試着、国立織物博物館、紙漉き工房、中央政庁



棚田風景

（タシチュ・ゾン）、第3代国王記念仏塔、現地のJICA、伝統美術学校を訪問。続いて標高3100mのドチュラ峠を越えて旧都プナカへ。プナカ・ゾン（城）を見る。バード・ウォッチングの後、野菜市場を見学、ノブカン村へ。途中、現地ローヤル・テキスタイル・アカデミーとの交流会もあって、7日目の朝、パロを出発、コルカタ・バンコク経由で翌日早朝羽田帰着。

白と茶を基調とし、庇には色彩豊かな細かな彫刻、壁には様々な仏画の描かれる美しい家屋、そこここに見える寺院、緑豊かな山々と棚田、清らかな流れ、はためく旗。親切でシャイな人々、犬と牛が遊ぶブータンはどこまでも美しく優しい。

木村清治

樋口秀司先生がなくなったのは一昨年の12月のことです。早いもので今年は三回忌ということになります。法号は樋口さんらしく「教球秀道清信士」です。

昨年8月16日に、標記のような見学会を実施致しました。その概要を報告して、冥福を祈りたいと思います。参加者は、都歴研友の会からは私を含め4人、都歴研現役からは5人、新島からの参加が1名で、合計10名でした。

見学会については、早くから実施しようとの意見があり、見学委員会とりわけ委員長の金沢先生が中心となって計画がされ、現地では古川先生が案内役というものでした。

暑い夏の朝、竹芝8時出港で日帰りという計画でしたから、混雑と緊張感のなか乗船手続きを済ませ、予定通りに元町港に着きました。まず、予定を変更して郷土資料館に行くことになりました。クラシックな博物館でしたが、樋口さんの思い出話などをしながらの見学でした。ここは樋口さんが嘱託（非常勤教員）をしていたところでもあり、博物館の方も樋口さんをよくご存じでした。樋口さんが懸命に努められていた様子が窺えて、何とも切ない気持ちが湧いてきました。ここで、新島から参加の前田先生と合流し、岡田港近辺の史跡の見学に向かいました。前田先生は、島での教育とともに樋口さんと当たった方で、樋口さんの野球の取り組みなども話してくださいました。島の子供たちの教育、野球を通しての人材育成など、樋口さんの教育活動のあり様を感じました。そして、史跡見学は、力士伝吉の墓や八幡神社や竜王神社などをまわりました。用意していただいた資料などを参考に考えると、伝吉さんはペリーの遠征記に出てくるような役割だったのかなと想

いを巡らせました。

昼食は、元町のすし光でした。この店は、樋口さんが健在の頃連れて来て貰った店で、懐かしいものでした。食べ物というと、島の見学会で「たかべ」の話しをされていたのを思い出しました。食事後は、樋口さん創設の「ふるさと文庫」に向かいました。外からはさほどの規模ではないと思いましたが、中へ入って絶句しました。なんという量と種類。仕事をこなし、家事をこなしながらの文庫の経営、その努力に脱帽です。今後、文庫はどうなるのだろうと思いつつながら、文庫前で集合写真の撮影をしました。

樋口家の檀家寺は海光山福聚寺という禅寺で、お墓は少し離れた丘陵地にある地区の墓地です。皆さんそれぞれ線香をあげ、私は持参の小山酒造の酒を供え、ご供養を致しました。次に波浮港に向かい旧港屋旅館などを見学し、さらに土砂崩れの災害のあとを見て、元町港にて帰途に着きました。港で若干時間がありましたので、皆さんお土産を購入いたしました。金沢さんとビールを購入して、皆さんにお配りしましたが私の席の列に磯山先生がいらしたのが印象深いものでした。

樋口さんといえば、「クサヤ」「アシタバ」「牛乳せんべい」が思い起こされます。区内に見える時はいつもお土産を持参する実に律儀な方でした。うちの家族は「牛乳せんべい」が大好きでした。大島をこよなく愛し、誇りに思う方でした。都歴研の見学会でも「クサヤ」を持参していました。

私は樋口さんの堂々たる生き方に、大いに敬意を払うものです。郷土を愛し、歴史を愛し、人を愛し、野球を愛して人生を生き抜いた樋口さんの魂の安らかなれ、と祈るばかりです。

史跡見学会のご案内

源頼朝時代の鎌倉を求めて

＜今年度は泊を伴う海外・国内研修は実施しません。日帰りの研修のみ実施します。＞

一般的に鎌倉の史跡というと、建長寺・円覚寺等禅宗寺院、妙法寺・妙本寺等日蓮宗寺院、あるいは「鎌倉大仏」(高德院)等を想いますが、これらは鎌倉中後期のものです。

今回は特に「源頼朝時代の鎌倉」をテーマに、開府時期に関する史跡、特に頼朝時代の創建にかかる3寺院を中心に廻ります。

鎌倉の基本的設計図はどんなものか？ 若宮大路の若宮とは何か？ 八幡宮の鶴岡とはどこのことか？ 3寺院の役割の違いは何か？ 幕府役所はなぜここにおかれたのか？ などを基本に立ち返って考えたいと思います。

今年は、鎌倉の史跡に関して大変喜ばしいことがあります。平泉中尊寺を模して建造したといわれる二階堂永福寺が、史跡指定50年にして、今春4月に見事に復元(土壇・前池)完成され感動的な姿を見せてくれます。

全コース徒歩、かつ何か所か登るところもありますが、よろしければご参加ください。

実施日 2016 (H28) 年 11 月 15 日 (火)

集合 午前 10 時 JR 鎌倉駅西口 (江ノ電側) 出てすぐ右側の時計塔広場

テーマ 「源頼朝時代の鎌倉を求めて」

コース 鎌倉駅→北条政子・源実朝の墓 (伝) →寿福寺 (源義朝屋敷跡) →若宮大路・三の鳥居→丸山稲荷→鶴岡八幡宮上宮 (宝物館見学) →若宮→昼食 (柳原休憩所) →西御門跡

→太平寺跡・来迎寺 (如意輪観音像)
→源頼朝の墓 (法華堂跡)・勝長寿院
跡遠望→大江広元の墓→大倉幕府跡
→荏柄天神→二階堂永福寺跡→大塔宮
バス停 (解散)

昼食 柳原休憩所における軽食。(各自負担。お弁当持ち込みはできません。)

解散 15 時 30 分ころ大塔宮バス停にて解散。(乗車後、鎌倉駅まで約 15 分)

参加費 拝観料・資料代・郵送料等を併せ、おひとり千円集合時に集金します。

申し込み 資料用意の都合がありますので、9 月末日までにお申し込みください。

資料送付 参加申し込み者には、10 月半ばに詳しいご連絡をお送りいたします。

.....

参加申し込み方法

参加者名、郵便番号、住所、電話 (あれば携帯) を記載の上、下記いずれかの方法で担当者へお申し込みください。

メール: oz22@oregano.ocn.ne.jp

Fax: 042-391-9500

ハガキ: 189-0026 東村山市多摩湖町 4-14-13

担当者: 小澤拓美

都歴研友の会 2016 年度総会報告

友の会総会は、6 月 18 日 (土) 都立三鷹中等教育学校にて開催されました。出席者 9 名で創立以来の多数でした。事業・決算報告および予算案は、いづれも提案通り可決しました。本会の独自企画としての研修旅行を今年度は宿泊を伴わない日帰り史跡見学会とすること、今年度も歴史教育研究助成制度を活用すること、などを確認しました。また、新年度世話人として新たに竹内秀一さんが加わりました。

訃報 礪山 進 先生

昨年 9 月初めにくも膜下出血で入院、5 ヶ月間の闘病の末 1 月 31 日にお亡くなりになりました。都歴研では見学委員長・都歴研会長を歴任され、友の会世話人を務めていただきました。早すぎる御逝去でした。ご冥福をお祈りします。